

支援の質の向上に向けた取組等について

(1) サービス満足度調査の見直し

- 【目的】 従来の調査項目には、家族向けの調査に食事や入浴等実際に体験できない質問があり、また児童向けの調査に答え方の難しい質問があった。これらの質問項目を改め、またできるだけ多くの利用者からの意見を引き出すことができるよう、質問項目等についての見直しを行うこととする。
- 【方法】 各職場の支援員等から構成される「サービス満足度調査票作成チーム」を設置した。年度末までに試案を作成して、来年度に事業団職員と保護者会役員に確認をしていただき成案とする。その後、平成30年8月に利用者・家族への調査を実施する予定である。
- 【委員】 養育園 男性支援員（4年勤務）
 更生園 女性支援員（5年勤務）
 診療室 女性看護師（21年勤務）
 事務局 女性事務員（6年勤務）
 ＊アドバイザー 渡邊養育園施設長
- 【経過】 12月 第1回打合せ 理事長から検討のねらいを説明
 第2回打合せ 調査の視点、調査対象の分け方（ご家族・利用者・職員）、追加すべき事項について協議

(2) 職員研究の奨励

- 【目的】 職員育成のための重要な要素である研究事業を奨励し、支援の質の向上を図る。この研究活動を通じ、障害特性や強み・弱みの理解を更に深め、方法論に頼らない真に望ましい支援について考える。また、その結果を積極的に情報発信する。
- 【既に取り組んでいる研究活動】
- ①「認知症を発症したダウン症の支援の在り方研究」（研究チーム3人）
 平成27年度 活動開始
 更生園利用者で認知症と診断された男性の診断前後の生活行動や支援の変化について、振り返りと整理を開始した。
 平成28年12月
 福祉協会主催の施設長・職員研修会において更生園の事例を報告した。
 平成29年5月
 県内障害者支援施設の認知症等実態調査を実施した。
 平成29年10月
 「第1回認知症セミナー」を開催した。（参加者：81名）
 県内調査結果について報告すると共に、国立のぞみの園からの実践報告を受け、岡山県の社会福祉法人旭川荘における総合研究所の医師である桑野良三氏から「認知症のメカニズム」について講演をうけた。
- ②「知的障害者の易骨折性に関する研究」
 一度骨折すると日常生活が著しく不自由となり、また骨折は治りにくいためその後の行動制限が多くなることが実証されている。特に知的障害のある方は骨折後の治療が困難なことも多く、また骨折防止の自発的な取組も十分でない場合が多い。
 知的障害のある方は骨折しやすいのかについて検証し、将来的には骨粗鬆症と関連した骨折防止のためのプログラム開発を目指す。
 平成29年10月 更生園利用者に係る骨折事故の振り返り調査を開始

【年度内に取り組みを始める研究活動】

①「ASD（自閉症スペクトラム）体験世界の研究」

応用行動分析やティーチプログラム等、自閉症支援の考え方や方法はようやく確立してきたが、一方でASDの方々からは、様々な生活上の困難や感覚の違い等も発信されるようになり、彼らが「何に困り、何に苦しむのか」がわかるようになってきた。

ASD当事者の発信を支援現場で受け止めて整理・分析し、理解を深める。

＊強度行動障害支援や自閉症支援の方法を支えるものとして情報発信する。

（３）歯科医師・栄養士の連携支援活動

【目的】 更生園の高齢化の進む利用者にとって、咀嚼嚥下機能の低下は窒息等の事故に繋がる可能性が高い。また養育園にも咀嚼や嚥下が困難な児童は多い。

歯科医師及び歯科衛生士が食事場면을巡回し、支援員への指導を行うとともに、個々の利用者の状態に合った食事形態を実現するため連携をとる。

【活動内容】

- | | |
|---------|--------------------------------------------------------------------------------------|
| 平成29年5月 | 歯科医師及び歯科衛生士の食事場面での巡回を開始し、利用者の食事摂取の状況を踏まえ、食事姿勢や介助の方法、必要に応じた刻み食やソフト食へのメニューの切替等の指導を行った。 |
| 平成29年6月 | 「咀嚼嚥下機能の低下に対応した食事支援研究会」
支援員、歯科医師、歯科衛生士、看護師及び栄養士等60名程が出席 |
| 平成30年2月 | 「医療講座（公開講座）」 ＊県内事業所へ通知済み
咀嚼嚥下に係る支援の有り様について、診療室の歯科医師による講義等 |